



郵政歴史文化研究会編

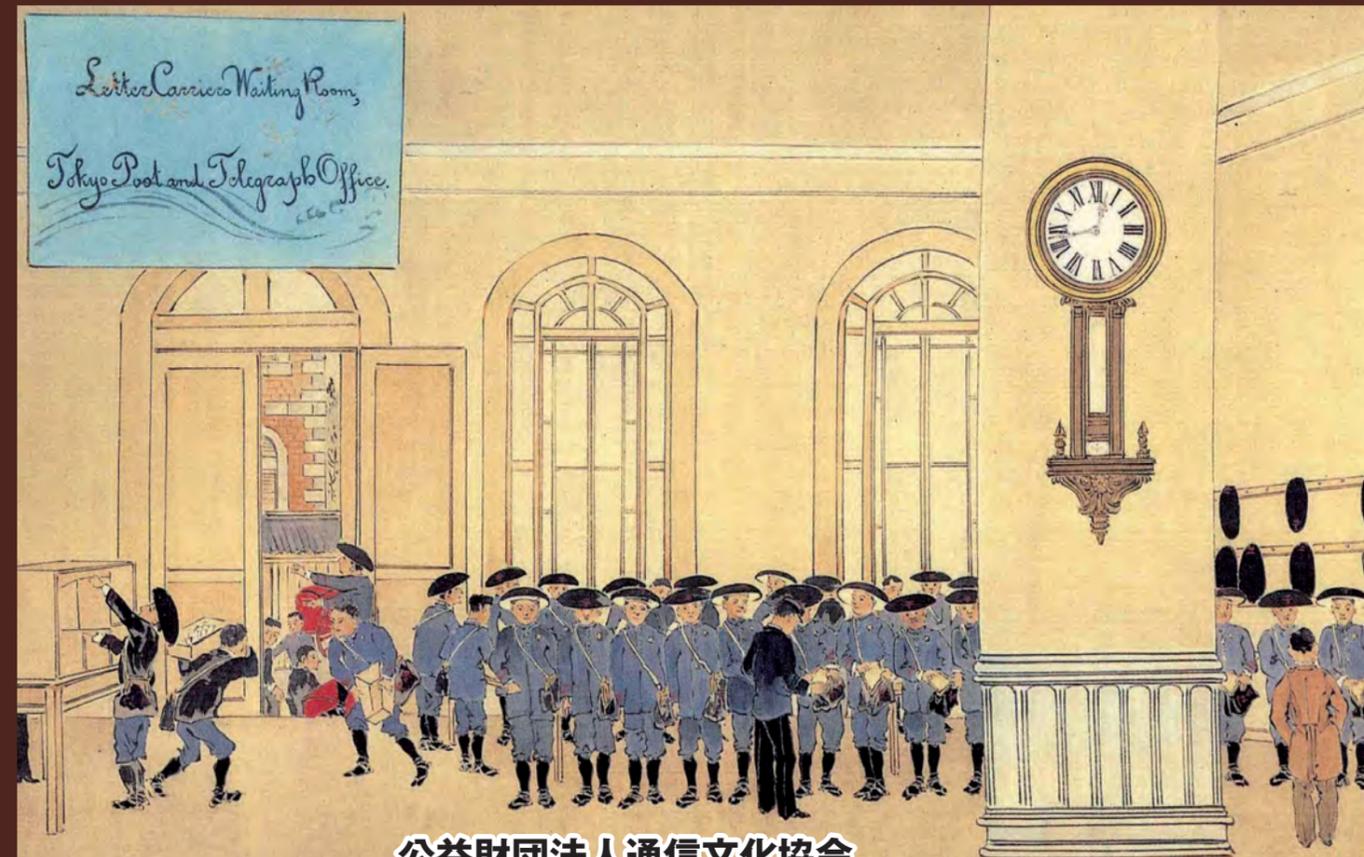
# 郵政博物館 研究紀要

平成29年度 第9号 (2018年3月)

郵政博物館

研究紀要

平成29年度 第9号 (2018年3月)



公益財団法人通信文化協会

## 表紙解説

『郵便現業絵巻』(久保田米僮<sup>べいせん</sup> 郵政博物館収蔵)<sup>1</sup> 部分図

### 第三図 東京郵便電信局の郵便物差立区分室

1階に到着した郵便物を吹き抜けの手動リフトで引き上げ、差立区分を行って郵袋に収めるまでの工程が描かれる。アーチ壁で区切られた広々とした空間、区分台や区分棚にあふれる膨大な郵便物、忙しく立ち働く内務員が日本における郵便の活況を伝えている。高い天井からは赤いコードのペンダント・ライトが吊られ、明治20(1887)年に東京電燈によって開始された市内配電を、東京郵便電信局がいち早く取り入れていることがわかる。

### 第四図 郵便外務員出発時の点検

時刻は12時43分頃。配達前に整列し、監督者から携行用品や身だしなみの点検を受ける外務員が描かれる。制服は紺小倉織の上衣と半袴、脚絆に草鞋。黒丸笠と袖口の〒マーク、配達鞆の「郵便」文字、左胸の番号碑が統一感を高めている。西洋風の角柱に掛けられたローマ数字の優美な時計、半円形アーチの扉越しにのぞく赤レンガ造りの建物が、日本の近代化を効果的に印象づける。左の区分棚背面から引出を抜き取って運ぶ局員たちによって、静的な構図に活気が添えられている。

---

<sup>1</sup> 明治26(1893)年、アメリカ合衆国シカゴ市で開催された「コロンプス世界博覧会」に出品するために制作された作品。詳細は、『郵政博物館研究紀要』(第8号、2017年)を参照。